

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：24501

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K18530

研究課題名(和文)日米の相互関係による核イメージの構築・変容・社会的影響に関する研究

研究課題名(英文) Research on the Construction, Transformation and Social Impact of Nuclear Image based on the mutual relationship between Japan and the U.S.

研究代表者

山本 昭宏 (YAMAMOTO, AKIHIRO)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70644996

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：戦後日本における核エネルギーに関する言説と表象に焦点を絞って研究を進めた。どの部分がアメリカに由来するものなのか、それはいつごろ形成されたのか、という点に着目した。日本では、軍事利用を含む核エネルギーへの期待感については、すでに一九四〇年代前半には一定程度定着していたが、占領下においてアメリカの新聞・雑誌の情報が入ってくることで、よりいっそう期待感は増した。他方で、核エネルギー平和利用への根本的疑問は、日本では一九七〇年代に次第に芽生えるが、これもまた同時代のアメリカの言論状況に端を発していた。さらに、ポピュラー文化における核の表象も、アメリカの大衆文化の強い影響下にあったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「被爆国」「平和国家」というアイデンティティを掲げた戦後日本では、核の軍事利用を否定し平和利用を称揚するという「独自」の認識が広く共有された。では、この認識がどの程度まで「独自」といえるのか、そこにいかなる問題があったのか、検証の余地があった。そこで、本研究では、まずアメリカにおける核をめぐる議論や表象を調査し、次にそれを戦後日本の議論や表象と突き合わせることで、「独自の認識」の内実を検証し、明らかにした。

研究成果の概要(英文)：My research focuses on discourse and representation on nuclear energy in postwar Japan. In the first half of the 1940s, expectations for nuclear energy were established to some extent. When American newspapers and magazines were introduced during the occupation, expectations were even higher. On the other hand, fundamental questions about the peaceful use of nuclear energy began to emerge in Japan in the 1970s. This also came from America in the same period. It also found that the nuclear representation of popular culture was also strongly influenced by American popular culture.

研究分野：メディア文化史

キーワード：各エネルギー 原爆 原発 核兵器 大衆文化 冷戦 核イメージ

1. 研究開始当初の背景

申請者のこれまでの研究は、戦後日本の核エネルギー認識の構築と変容を、もっぱら国内の議論を資料にして、辿るものだった。

しかし、核エネルギー認識に限ったことではないが、文化的受容や社会意識の生成・変化は、他の国や地域と無関係ではない。とりわけ、核エネルギー認識については、「原爆投下国」であると同時に、日本の占領で最も重要な役割を担ったアメリカの影響を無視することはできない。

しかしながら、日米の核エネルギー認識(言説・表象)は、それぞれ個別に記述されることが多かった。相互関係を解明する研究は、特定の作品研究にかたよっていた。

こうした課題を意識しつつ、次のような研究の目的を定めた。

2. 研究の目的

戦後日本の核エネルギー認識について、どの部分が「日本独自」であり、どの部分が「日米の相互影響のもとで構築された」と言えるのか、どの程度までアメリカに由来する価値観の影響を受けているのか、その解明を目的として定めた。

これは巨大な問いであるため、「核エネルギー認識」を支える要素として次の二点に注目した。それはメディア言説とメディア表象である。

前者は(戦後世界を扱うということもあり)影響力が高い新聞・雑誌の調査を行った。

後者については、映画と文学、サイエンス・フィクション、マンガの調査を実施した。

3. 研究の方法

まず、アメリカのマス・メディアについて、「広島・長崎」「放射線」「核開発競争」「核エネルギーの平和利用」などの言説・表象に焦点を絞って調査した。

アメリカの新聞については日本からデータベースを利用して概観することができた。さらに、大衆小説誌・大衆科学誌、単著の文芸書やサイエンス・フィクションについては、主にニューヨーク公共図書館にて、実物を調査することができた。

その後、(これまでの研究で私が積み重ねてきた)日本における核エネルギー認識の歴史的展開と照合する作業を進めた。

具体的には、まず、核を扱った日米の大衆文化の年表・リストを作成し、表象の相互参照関係や歴史的前後関係の推定作業を行った。一例を挙げるならば、原子力・放射線に関するヒーロー・モンスターの系譜を年表・リスト化する、という作業である。

次に、社会的論議(メディア言説)について、同様に言説の相互参照関係や歴史的前後関係の推定作業を行った。これについても例を挙げるならば、原子力発電所のリスクをめぐる報道の推移(放射線の影響、事故の評価、原子炉の設計に関する専門家の議論)などを年表・リスト化した。

これによって、日米の相互関係による核エネルギー認識のどの部分が、「日本独自の核エネルギー認識」として認知されるようになったのか、言説と表象の二つの局面に限ってではあるが、明らかにできると考えたのである。

4. 研究成果

・文学から大衆文化までを含む広義の「文化」に描かれた核エネルギー認識について記述した。核エネルギー認識の特定の部分が、どの程度までアメリカに由来するものなのか。この問いを、大江健三郎の言論と作品を中心に、同時代のメディア言説の考察を行いながら、記述したのである(拙著『大江健三郎とその時代』人文書院、2019年)。

そのなかでは、科学的かつ大衆的な想像力が日本に流入・定着していること、核シェルターをめぐる文学的想像力がアメリカ由来であることなどを明らかにした。

・日本の1960年代から70年代のメディア報道における原子力発電所の位置づけについて、アメリカの社会運動の影響が(アメリカのマス・メディアを通して)日本に及んでいたことを明らかにした。

そのことについては、現在論文を執筆中であるが、その予備的考察を一般向けに刊行した「研究成果の一環」として、拙著『原子力の精神史』を挙げておく。

・アメリカの大衆科学雑誌およびサイエンス・フィクションの調査は、日本における核をめぐる大衆的想像力の「出典」を解明するための手がかりを得るために必要な調査であった。これはたとえば、大衆文化に見られた放射線による「変身」という発想がどこから来たのかを明らかにするというような調査である。

しかし、最終年度は海外調査が叶わず、この点については十分に解明できたとは言えない。今後も研究を続ける必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山本昭宏	4. 巻 18
2. 論文標題 企画趣意と『原爆が遺した子ら』内容紹介 小特集 テレビ・ドキュメンタリーと原爆小頭症	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 原爆文学研究	6. 最初と最後の頁 182-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本昭宏	4. 巻 66巻3号
2. 論文標題 原発災害後の日本の言説空間に関する覚え書き：深谷報告・松下報告へのコメントに代えて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会志林	6. 最初と最後の頁 123-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本昭宏
2. 発表標題 「戦後民主主義」と「軍事」研究：1950年代初頭の原子力研究の開発体制をめぐる学会会議の議論を通して
3. 学会等名 戦争社会学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本昭宏
2. 発表標題 90年代の原爆をめぐる議論と「東アジア / 日本 / アメリカ」～長崎原爆資料館の「加害展示」をめぐる議論・運動を手がかりに
3. 学会等名 原爆文学研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山本昭宏	4. 発行年 2019年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 330
3. 書名 大江健三郎とその時代	

1. 著者名 山本昭宏	4. 発行年 2021年
2. 出版社 集英社	5. 総ページ数 221
3. 書名 原子力の精神史 核と日本の現在地	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------